

44th RELC International Seminar 参加報告

村田泰美 (名城大学)

2009年4月20日から22日まで第44回 RELC International Seminar がシンガポールで開催された。今回のテーマは **The Impact of Technology on Language Learning and Teaching: What, How and Why** である。RELC の東南アジアにおける語学教育、特に英語教育に対する研究や、教師養成、ならびに教員研修の質の高さや、その中心的役割については認識していたものの、今回初めてセミナーに参加して改めて RELC の存在の大きさを実感した。東南アジア 12 カ国の政府が運営に関わっているからだろうか、オープニング・セレモニーには大使や大使級の来賓が登場し、会場の雰囲気はかなりフォーマルなものであった。今年のセミナーはタイの全権大使のスピーチで始まった。

セミナーは昨年度からそれまでの4日間から2日間半へと短縮されたと聞いたが、初日は7時45分からレジストレーションが始まり、2日目と3日目は8時半開始で、開催期間は短くとも18時近くまでプログラムがあり、中身は大変充実していた。セミナーは招待者による講演、パラレル・セッション形式の口頭発表、およびワークショップという3部構成になっている。今年のセミナー参加者数は名簿を見ると470人余りである。

私は JACET 代表として第一目の一番最初のスロットを頂き **Teaching English with iPods: Motivating Learners** という題で研究発表を行った。教室は60人用だと聞いていたが、全部で九つのパラレルがあったことから到底60人は集まらないと予想し、配布資料は35部しか準備して行かなかった。しかし iPod という名前の威力だろうか、60人以上の聴衆が集まってしまった。二人で共有をお願いしたが、それでも資料が不足したので、単純計算でも70人以上の聴衆がいたことになる。発表には批判も含めてさまざまなフィードバックを頂いた。私の発表を聞いて、「早速 iPod を買ってクラスで使ってみる」という先生方が何人かいらっしゃったのが、大変うれしかった。配布資料に関しては最終日まで「一部欲しい」という人がいて、一種のアジア的社交辞令かと思ってしまう程であった。

招待講演は「Technology と英語教育」という分野の第一人者を世界各地から12人も揃えただけあって、聞き応えのあるものであった。特にスタンフォード大学の Philip Hubbard 氏による **Listening to Learn: New Opportunities in an Online World** には触発された。語学教育の質的向上のためにはすでにテクノロジーなしではやっていけないところまで世界は進んでいるのだと思われた。個人的にはまだ苦手意識があるのだが、そうも言うてはいられない時代に突入しているのだろう。

反面、インドの参加者の発表では貧しい田舎の子どもたちに英語を教えるため、ラボを使ってどのように奮闘しているかという報告もあり、われわれの住む世界に存在する格差を見せつけられた。

新学期が始まって間もない時期に開催されるためだと思うが、日本からの参加者はほとんどいなかった。参加する意義の大きい、価値あるセミナーであるので、先生方にぜひお勧めする次第である。

以上